

# オノマトペ（擬音語，擬態語）と比喻に関する 看護学生の認識の調査

三井 弘子，大津 廣子，中井 美智子，  
中村 美紀，林 暁子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

研究報告

オノマトペ（擬音語，擬態語）と比喩に関する  
看護学生の認識の調査

三井 弘子，大津 廣子，中井 美智子，  
中村 美紀，林 暁子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

キーワード： オノマトペ， 比喩， 学生の認識

要 旨

本研究は、オノマトペ（擬音語，擬態語）と比喩に関する看護学生の認識を明らかにし、看護技術のデモンストレーションへのオノマトペと比喩の活用について検討する目的で行った。研究対象は、A 大学看護学科の学生で同意が得られた 262 名である。調査は、筆者らが独自に作成した質問紙をもちいて、オノマトペと比喩に関して①使用頻度，②見聞きする対象，③日常使用する表現，④イメージする内容，⑤わかりやすさ について集合法で実施した。調査の結果、オノマトペと比較して比喩は「わかりにくい」と感じるものが多く、日常的に見聞きしたり利用したりする回数が少なかった。これらの用語をデモンストレーションに用いる場合は、学生の生活体験に基づく表現を用いる、事前の講義などを通して用語を活用する、理解しやすい直喩表現を用いるなどの必要がある。オノマトペや比喩は、視覚情報を補足し動作のコツを伝えることができるとともに、学生の発展的思考を促すものであると考えられる。

## はじめに

オノマトペとは、擬音語（または擬声語）や擬態語などの総称であり、擬音語は「カツン」「カチャ」「コンコン」などのように実際の音を模倣し表した言葉であり、擬態語は音そのものではなく「ガチガチ」「ガンガン」「フワフワ」などのように目に見えた動きや状態を表した言葉である<sup>1)</sup>。「オノマトペ」という名称自体を耳にする機会はありませんが、岡谷<sup>2)</sup>によると日本語を母語とする者は、言語習得が開始される乳児期からオノマトペを耳にし、成長する段階で家族や友達、テレビ、マンガなどの影響を受けて自然と習得するとしている。また、早野ら<sup>3)</sup>は、日本のマンガが世界で認められるなか、日本人がオノマトペをもっとも目にするのはマンガであるとし、マンガを活用した国語教育に言及している。

近年、スポーツ科学の分野では、運動のコツを伝える指導言語としてのオノマトペの研究が行われている。山内<sup>4)</sup>らは、スポーツ指導者が運動スキルの指導場面で使用するオノマトペに含まれる音声特性には、大きさやスピードといった筋力および動きの運動感覚特性のイメージを想起させる効果があり、それにより選手たちは運動スキルの調節を行っているとしている。

医療の分野においては、石田ら<sup>5)</sup>は、患者が擬音語や擬態語によって表現した自覚症状が、医学用語と同等以上の説明語意を表現することを明らかにした。また、服部ら<sup>6)</sup>は、微妙な患者の状態を表わしたり、状態の変化に対応した手技を喚動（動きを呼び起こす）するために、看護師は、オノマトペを頻繁に用いていると述べている。このように、オノマトペは、医療や看護の分野でその有用性が認識されているが、デモンストレーションの指導言語として研究されているものは大津ら<sup>7)</sup>の研究のみであった。

比喩は物事の説明に類似したものをもちいて表現するもので、「太陽のようだ」のようにたとえるものがはっきりとわかるように表現する直喩と、「人生は旅だ」のように類似するもので代置する隠喩と、人でないものを人に見立てて表現する擬人法がある。

オノマトペと同様に、比喩も運動学習分野において有

用性が認められている。永山ら<sup>8)</sup>は、「比喩的な指導言語は、選手に複雑な動作の本質を1つのまとまりのイメージとして伝えることができる」としている。

看護分野においては、富山ら<sup>9)</sup>は、デモンストレーションを観察した学生に、デモンストレーションの実施者の動きを、自分なりの表現で記述させたところ、比喩や擬態語による表現がみられ、それらは動きの再現性を高める傾向があったとした。

筆者ら<sup>10)</sup>の研究で、看護技術のデモンストレーションを見学し、後日それを録音したものを聞かせ、印象に残った言葉、理解できなかった言葉を自由記載で回答を求めたところ、教員が聞き手にイメージを喚起させる目的で用いられたオノマトペや比喩を理解しにくいと感じる学生が少数ながら存在したことが明らかとなった。

そこで本研究は、オノマトペと比喩を学生がどのように認識しているかを調査し、効果的な指導言語について検討する。

## 1. 研究方法

### 1. 研究対象

A 大学看護学部の1年生から3年生のうち、調査の同意が得られた262名（1年生88名、2年生93名、3年生81名）を対象とした。

### 2. 研究時期

平成28年7月

### 3. データ収集方法

調査は筆者らが独自に作成した質問紙を用い、1. オノマトペおよび比喩の使用頻度、2. オノマトペと比喩を聞き取る対象、3. 日常用いるオノマトペと比喩、4. オノマトペおよび比喩を含む文からイメージされること、5. オノマトペと比喩のわかりやすさ について、学年ごとの集合法により実施した。なお、今回の調査では、比喩は

直喩のみを対象とした。

#### 4. 倫理的配慮

研究に際して、A 大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。調査に際しては、対象者に研究概要等を記載した説明用紙を用いて説明し、不参加による不利益がないこと、途中での辞退が可能であることを説明した。調査に関する理解を得た上で実施し、質問紙の提出をもって調査に対する同意が得られたとみなした。

#### 5. 分析方法

回収した質問紙をデータ入力し、有効回答について単純集計および、学年別の差異についてカイ2乗検定（期待度数が5未満のセルが20%以上ある場合は、フィッシャーの直接法）を行った。

## II. 結果

対象者は262名で、全員から回答が得られた。このうち、有効回答数は257であった。

### 1. オノマトペと比喩の使用頻度

擬音語、擬態語、比喩の使用頻度について(1) 毎日(2) 1週間に2~3回、(3) 1週間に1回、(4) 1ヶ月に2~3回、(5) 1ヶ月に1回(6) 全く使用しない から択一式で回答を求めた(図1)。

全体で、擬音語と擬態語では、「毎日」と回答するものが多く(擬音語68.2%、擬態語65.0%)、次いで「1週間に2~3回」が多くあった(擬音語15.5%、擬態語21.4%)。使用頻度については、擬音語と擬態語は類似した分布を示したが、比喩は「毎日」と「週に2~3回」と回答するものが同率(26.6%)で多かった。擬音語や擬態語と比較すると、比喩を用いる学生が少なく、「月に1回」と「全く使用しない」を合わせると2割程度であった。表1は、オノマトペおよび比喩の使用頻度を学年別で示している。

学年間で差があるか検定したところ、擬音語と擬態語において有意差が認められた(Fisherの直接法  $p < 0.05$ )。どの学年で差があるかを明らかにするために、それぞれ2つの学年で有意差を検定したところ、2年生と3年生で擬音語(カイ2乗検定  $p < 0.05$ )と擬態語(カイ2乗検定  $p < 0.05$ )に有意な差がみられた。学年別に差があった2

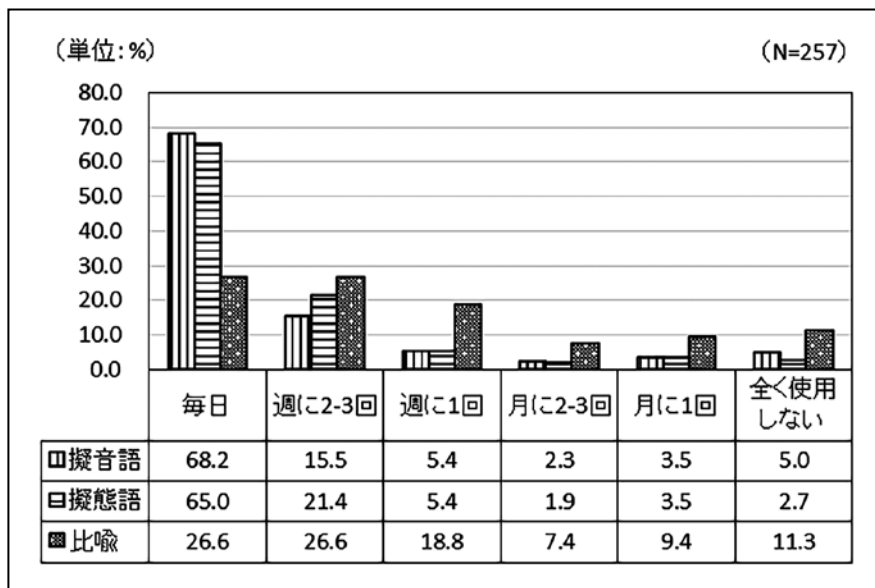


図1 オノマトペおよび比喩の使用頻度：1~3年生

年生と3年生については、使用頻度が最も高いものが毎日、ついで週に2~3回と回答する傾向は同じであったが、3年生の方が回答のばらつきが大きくその傾向は擬音語と擬態語の双方で同様にみられた。

## 2. オノマトペと比喩を見聞きする対象

擬音語、擬態語、比喩の見聞きする対象について(1)同年代の友人・知人、(2)家族、(3)教員、(4)年上の友人や知人、(5)年下の友人や知人、(6)テレビなどの映像メディア、(7)書籍(漫画を含む)等の活字メディアから該当するものすべてについて複数回答を求めた(図2)。

擬音語と擬態語はともに「同世代」と回答するものが9割以上あった。次いで「家族」と回答するものが6割あった。擬音語と擬態語は、使用頻度の質問と同じく、回答の分布が類似し、「教員」「年上の友人・知人」「年下の友人・知人」が3割程度、「映像メディア」が5割、「活字メディア」が3割弱であった。比喩は、「映像メディア」と回答するものが最も多く、近い数値であるが、次いで「同世代」と回答していた。また、比喩は、「教員」「映像メディア」においては擬音語や擬態語とほぼ同率の回答であったが、「同世代」「家族」の割合が低く、「活字メディア」の割合が高かった。

表1 オノマトペおよび比喩の使用頻度：学年別

(単位:人)

使用頻度	擬音語			擬態語			比喩		
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
毎日	58	76	42	53	72	42	24	28	16
週に2-3回	12	12	16	20	16	19	21	26	21
週に1回	4	2	8	7	2	5	12	22	14
月に2-3回	5	0	1	2	1	2	8	4	7
月に1回	2	1	6	3	0	6	11	5	8
全く使用しない	6	2	6	2	2	5	11	8	13
学年別合計	87	93	79	87	93	79	87	93	79

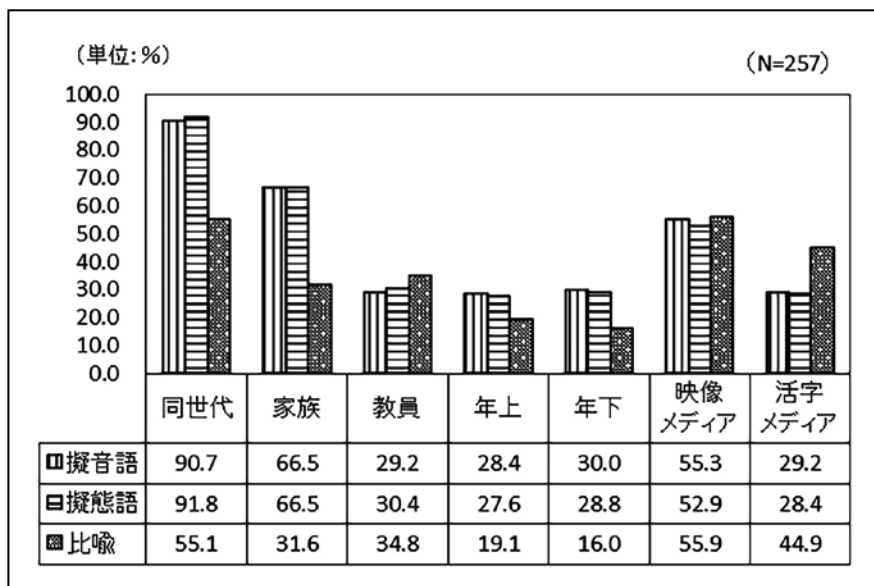


図2 見聞きする対象：1~3年生

3. 日常用いるオノマトペと比喩

擬音語、擬態語、比喩について、よく用いる表現を自由記載で回答を求めた（表2）。

4. オノマトペおよび比喩を含む文からイメージされること

擬音語、擬態語、比喩を含む文章を提示し、それぞれ異なる3つの説明文と「その他（自由記載欄あり）」

「イメージできない」の2つを含む5つの選択肢から最も適したものを択一式で回答を求めた。表3は、回答が分かれた擬音語、擬態語、比喩を含む文章および選択肢で、表4は回答が分かれた質問について学年別に示したものである。なお、説明文の1つは、「擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典」小野正弘編著<sup>11)</sup>を参考に作成した。

学年間で差があるか検定したところ、「10）動物の群れはモサモサと移動した」（Fisherの直接法  $p<0.05$ ）、「22）ノパッと着替える」（Fisherの直接法  $p<0.05$ ）、「24）

表2 よく使用する擬音語・擬態語・比喩

語彙	回答（一部抜粋）
擬音語	どんどん、ガチャガチャ、ピュー、ぎよぎよ、ニコニコ、つるつる、ピカピカ、バタバタ、ザーザー シュツ、ピッピ、きらきら、ダーツ、さらさら、ふわふわ、もちもち、すべすべ、ムシムシ、ぱぱっと、わくわく、ずきずき
擬態語	にこにこ、ふわふわ、べちゃべちゃ、さばさば、べたべた、ぼさぼさ、べたべた、もちもち、むしむし、つるつる、ざらざら、ガラガラ、ぶくぶく
比喩	溶けそうなくらい暑い、バケツをひっくり返したような雨、馬車馬のように働く、目が回るような忙しさ、氷のように冷たい、目が泳ぐ、山のような課題の量

表3 回答が分かれた質問：1～3年生

質問	(N=257)	
	選択肢	回答数
5). すんなりと意見がまとまった	(1) 時間的に短い期間	109
	(2) 抵抗感なく事が進む様子	146
	(3) 多数決をとって決定する様子	0
	(4) その他(自由記載:)	1
	(5) イメージできない	0
23). 竹刀を持つように握る	(1) 手首の動きを妨げないように軽く両手で握る	38
	(2) 脇を締めて握る	154
	(3) 指先に力をこめて強く握る	29
	(4) その他(自由記載:)	2
	(5) イメージできない	32
24). バナナの皮をむくように中身をあげる	(1) 中身を崩さないようにやさしく むいていく	29
	(2) 一枚ずつ丁寧にむいていく	139
	(3) 上から下へと一番外側をはがしていく	73
	(4) その他(自由記載:)	2
	(5) イメージできない	10
25). 吸盤のような手で支える	(1) 離れないように密着させてささえる	91
	(2) 吸い付くように落とさずしっかりと支える	142
	(3) てのひらだけでなく指も含めて全体で支える	7
	(4) その他(自由記載:)	1
	(5) イメージできない	11

バナナの皮を剥くように中身をあける」(Fisherの直接法  $p<0.05$ ) で有意差が見られた。それぞれ2つの学年間で有意差を検定したところ、「10) 動物の群れはモサモサと移動した」は、1年生と2年生、2年生と3年生との間で有意差が見られた。「22) パパッと着替える」は1年生と2年生との間で有意差があり、「24) バナナの皮を剥くように中身をあける」は1年生と2年生、1年生と3年生の間で有意差がみられた(いずれもFisherの直接法  $p<0.05$ )。

全27問の質問は、オノマトペ22語彙、比喩5語彙で構成されていた。オノマトペについては、ほぼ同じイメージを抱いていたが、「鉛筆を持つように」などの比喩はイメージする選択肢が分かれた。特に「バナナの皮をむくように」の比喩は前述のように学年別で差が見られた。

### 5. オノマトペと比喩のわかりやすさ

擬音語、擬態語、比喩について、(1) わかりやすい、(2) わかりにくい、(3) どちらともいえない の選択肢とそれぞれに理由記載欄を設け回答を求めた(図3)。

比喩については学年で差が見られなかったがオノマトペについては有意差が見られた。擬音語では、1年生と3年生の間で有意差が見られ、擬態語では1年生と2年生および1年生と3年生で有意な差が見られた。1年生においてわかりやすいと回答するものが多く、これらの回答傾向は擬音語においては1年生と3年生、擬態語においては1年生と2年生の間で有意な差がみられた(いずれもFisherの直接法  $p<0.05$ )。

表4 回答が分かれた質問：学年別

(単位：人)

	10). 動物の群れは モサモサと 移動した			22). パパッと着替える			24). バナナの皮を むくように 中身をあける		
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
選択肢1	8	2	6	4	0	0	14	8	7
選択肢2	72	67	66	79	93	78	54	43	42
選択肢3	0	1	2	0	0	0	9	36	28
選択肢4	0	12	2	0	0	0	1	1	0
選択肢5	6	11	2	1	0	0	6	3	1
学年別合計	86	93	78	84	93	78	84	91	78

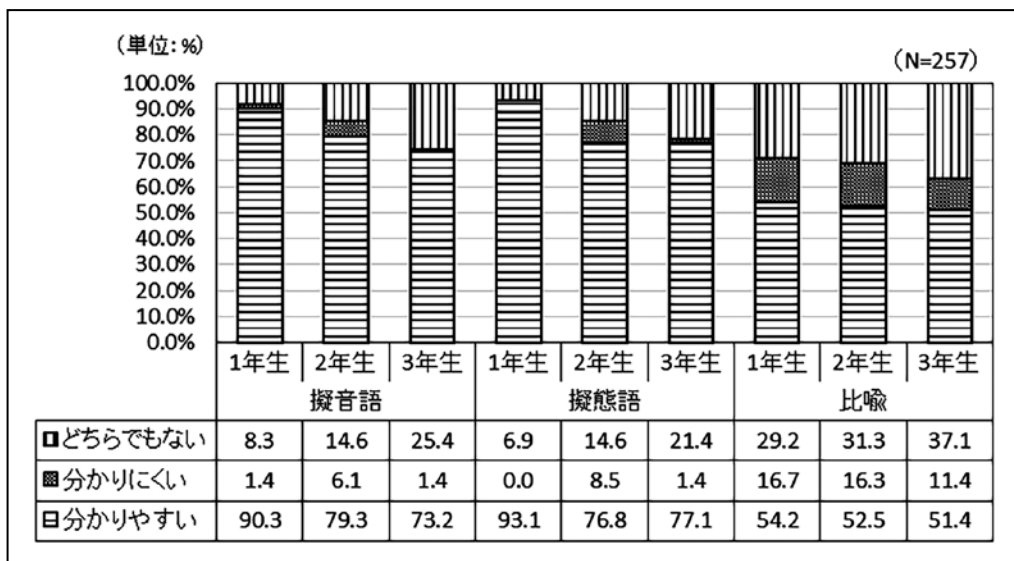


図3 オノマトペおよび比喩のわかりやすさ

### Ⅲ. 考 察

調査から明らかになったオノマトペと比喩に関する学生の認識について考察し、看護技術のデモンストレーションへの活用について検討する。なお、授業形態のひとつである演習における看護技術のデモンストレーションは、援助の最初から最後までの流れを見せ、複雑な動きや患者への配慮を目の前で再現させることで学生の理解を促すことを目的としている<sup>12)</sup>ものである。

#### 1. オノマトペと比喩の親しみやすさ

日常用いるオノマトペおよび比喩の記載数は、擬音語や擬態語に比べて、比喩の記載数が少なかった。このことから、使用頻度や見聞きする対象の結果と併せても、擬音語や擬態語は日常的に使用するものが多いが、比喩は日常的に用いるものは少ないということがうかがえる。その理由は、擬音語、擬態語、比喩のわかりやすさとその理由を尋ねた自由記載に見出すことができる。具体的には、「一度考えて解釈しなければならぬ」「言葉の意味が分からないとわからないから」などである。

平<sup>13)</sup>は、親しみのある比喩では、主題から連想できる語は喩辞に関連するような語の割合が多くなったが、親しみのない比喩では、主題から連想される語がそれほど多く想起されなかった。このことから、主題は比喩を理解することで意味変化を起こすが、親しみのある比喩だと、喩辞に関連する意味で理解されやすくなることが示された。

質問紙調査において、擬音語、擬態語、比喩について「わかりにくい」と回答し、その理由を記載したものの中で、比喩にのみ特徴的に表れたものに、「わかる人も分からない人もいるから」「解釈に個人差がある」といったものがある。つまり、比喩に多様な解釈の可能性を感じ、「自分自身ではなく、共通理解するためには難しい言葉である」と感じている学生がいると考えられる。このことから、デモンストレーションにおいて、具体的な動作を表現する際に比喩を用いる場合は、比較的言葉の意味を連想しやすい直喩を使用することによって、学生が「理解しやすい」と感じるのではないかと考えられる。

#### 2. オノマトペと比喩から連想されるイメージの一致性

連想されるイメージに関する質問で、回答のばらつきがみられたものには「すんなりと意見がまとまった」「竹刀を持つように握る」「バナナの皮を剥くように中身をあける」「吸盤のような手で支える」などがあったが、学年間で差が見られたのは「バナナの皮をむくように中身をあける」のみであった。このほかは、回答にばらつきがあるものの学年間には差がなかった。この表現は、A大学の2年生前期科目「診療援助技術論」のデモンストレーションで教員が度々用いた表現であり、該当科目を受講前の1年生が他学年と異なる回答であったことは、この理由によるものであると考えられる。また、回答のばらつきがあった中で、「イメージできない」と回答したものが最も多かった質問が「竹刀を持つように握る」であったが、竹刀を持つという行為がこれまでの生活体験になく、理解できなかったのではないかと考えられる。これらのことから、オノマトペや比喩から連想されるイメージは、それまでの体験に依存するということがこの調査からもわかる。よって、デモンストレーションでは、学生の生活体験に基づいて説明する、あるいは、援助に必要な知識を学習する講義の段階で、そうした表現を事前に用いてイメージさせ、演習での理解を促す必要がある。

#### 3. 学生の再現性を高めるための指導言語におけるオノマトペと比喩の活用

演習において、デモンストレーションで見学した動作を再現するということは看護技術習得において非常に重要である。

吉川<sup>14)</sup>は、運動やスポーツ領域で活用されている擬音語と擬態語をスポーツオノマトペと名付け、運動の「コツ」である動きのパワー、スピード、持続性、タイミング、リズムを表現する言葉であるとした。また、スポーツオノマトペを指導に用いることによって、感覚的理解が深まるだけでなく、指導者とのコミュニケーションが良くなるといった効果もあるとしている。デモンストレーションで見



学した動きは、視覚的にとらえた情報だけでは十分に再現することはできない、援助動作によって伝わる患者への力加減、患者の動作を妨げないようなタイミングなど、指導言語を通じて伝達する必要がある。

青木ら<sup>15)</sup>は、初心者と熟達者の指導者には、オノマトペの選定、用法、説明の技術などに差が見られ、熟達者はより多様で新規性のあるオノマトペを利用し、説明の視点も多様であったとしている。指導者が学習者に対して、指導言語を介して動作のコツを伝達しようとする際に、どのような言葉を選択するかが重要で、指導者の熟達度も影響する。今回の調査では、オノマトペや比喩で学生がイメージする内容に個人差が現れたものが少数であったが、学生反応を確認しながら、共通理解しやすい言葉を選択する必要がある。

今井<sup>16)</sup>によると、擬態語はより具体的で生き生きとしたイメージを想起させ、動きそのものに注意を向けさせる。このとき、聞き手は動きを心の中で模倣したり、動きの準備をしたりするために、脳が強く活動する。また、人は注意を向けた視覚情報しか記憶しないが、言葉を用いることで、聞き手の注意を向ける場所や記憶にとどめる部分に影響を与えることができるとしている。デモンストレーションの視覚的情報に運動のコツであるオノマトペや比喩を加え、動きをよりイメージしやすくするには、学習者の視線の先にその動作があることが重要である。

#### 4. 学生の発展的思考を促すための指導言語におけるオノマトペと比喩の活用

一般的に指摘されるように、擬音語や擬態語は人の五感（視覚、聴覚、触覚など）による感覚を言葉で表現しているため、イメージを表現できる一方で、曖昧で正確な意図が伝わりにくい可能性がある。

永山ら<sup>17)</sup>は、擬音語や擬態語などを用いた指導言語の曖昧さは、指導を受ける選手を「コツ」の探索へ向かわせるとしている。中西ら<sup>18)</sup>は、能の師匠は、弟子が常に演じ方に疑問をいだき、より良い演じ方を探し求め続ける指導言語（例えば「天から舞い降りる雪を受けるように」）を用いて、弟子の認識活動を活性化しているとした。

看護技術習得の授業形態の1つである演習においては、教員のデモンストレーション後に学生がグループ毎に看護師役、患者役、観察者役となって援助を実施する場合が多く、デモンストレーションでは援助の一連の流れを示している。つまり、学生はひとつひとつの動作を分断してデモンストレーションの再現を行うのではなく、一連の動きを見学した後に再現する。この際、再現の手掛かりとなるのが、手元にあるチェックリスト（援助行動と留意点を時系列で記載したもの）とデモンストレーションの記憶である。看護技術における基本的で共通の動作については、デモンストレーション時に教員がわかりやすい所作や指導言語で表現し、学生がその模倣を繰り返すことによって習得することが可能である。しかし、患者の多様な個別性に配慮した看護技術の習得には、1回のデモンストレーションでは習得することが困難である。この課題を解決するのが、オノマトペと比喩を用いた指導言語ではないかと考える。具体的には、「患者さんが自宅で安堵して排泄するのと同様に、床上で安全で安楽な排泄を行うために適切な環境整備が必要である」などの表現である。この表現から学生は、「自宅で安堵して排泄する」とは患者にとってどのようなことなのか、目の前の患者にとって身体的および心理的に安全で安楽な援助とは何であるか、援助者としてどのように行動すれば「適切な援助」となるのかなど、援助方法について学生が自らに問い続けることによって、個別性のある援助を習得することが可能となるのではないかとと思われる。

#### おわりに

今回の研究は、オノマトペと比喩について学生の認識を明らかにし、デモンストレーションへの活用を検討するものであった。

吉川ら<sup>19)</sup>は、エアロビクス指導において指導歴のない未熟練インストラクターと指導歴3年以上の熟練インストラクターの指導言語を比較するなかで、未熟練者は次の運動の指示に偏っているのに対し、熟練者は運動に至るまでのイントロダクションの時間が長く、受講者に運動の意欲をかきたてたり、雰囲気作りをする指導言語を用い

ているという特徴を明らかにした。学習者の看護技術習得を促すものは、理解しやすい動作の見せ方、視覚情報を補い運動のコツを伝える指導言語のみならず、学生の技術向上に対する動機づけであると考えられる。今後はこれらの要因も含めて研究を進めていきたい。

## 謝 辞

研究にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

なお、本研究は科学研究費助成事業（科学研究費補助金）の助成を受け実施した研究（基盤研究C 課題番号 26463242：代表・大津廣子）の一部である。

## 引用・引用文献

- 1) 藤野良考, 井上康生, 吉川政夫, 堀江繁, 仁科エミ, 山田恒夫, 他. スポーツオノマトペの実態について. 東海大学スポーツ医科学雑誌. 2005 ; 17 : 28-38.
- 2) 岡谷英夫. 小学校国語教科書に見るオノマトペと日本語教育. 人工知能学会論文誌. 2015 ; 30 : 257-264.
- 3) 早野慎吾, 宮田好恵, 松井洋子. マンガを活用した国語教育—授業実践から—. 都留文科大学研究紀要. 2018 ; 88 : 27-38.
- 4) 山内直人, 田中秀幸, 篠原和子. スポーツ指導者が運動スキル指導に用いる擬音語・擬態語—スポーツオノマトペの音声学的分析. 体育・スポーツ科学研究. 2016 ; 16 : 1-5.
- 5) 石田博子, 小野木雄三. 擬態語・擬音語に共起する語彙の感覚的分類に関する研究. 情報処理学会研究報告自然言語処理, 2006 ; 175 : 21-26.
- 6) 服部兼敏, 東山弥生. 看護における日本語オノマトペの意味. 看護研究. 2010 ; 43 : 315-323.
- 7) 大津廣子, 中村美起, 林暁子, 三井弘子, 中井三智子. 寝衣交換技術の演示時の指導言語にオノマトペを用いた効果. 鈴鹿医療科学大学紀要. 2018 ; 25 : 59-69.
- 8) 永山貴洋, 北村勝朗, 齋藤茂. 器械体操競技選手の学習方略に対して比喩的な指導言語が与える影響の定性的分析. 教育情報学研. 2005 ; 3 : 67-76.
- 9) 富山美佳子, 川島美佐子, 山本瑞恵. 基礎看護技術教育における比喩的言語表現活用の可能性—ベッドメイキング技術習得過程にある学生のレポート分析を通して. 足利短期大学研究紀要. 2013 ; 33 : 71-75.
- 10) 三井弘子, 大津廣子, 中井三智子, 中村美起林暁子. 看護技術のデモンストレーションを見学した学生が認知した言葉のテキストマイニング分析. 鈴鹿医療科学大学紀要. 2017 ; 24 : 135-146.
- 11) 小野正弘. 擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典. 小学館, 東京, 770 ページ, 2007.
- 12) 六角僚子. クリティカル・シンキングとアクティブ・ラーニングを促進する方略. 看護を教授すること (奥宮暁子, 小林美子, 佐々木順子 監訳), 医歯薬出版株式会社, 東京, 246, 2014.
- 13) 平知宏. 比喩理解と身体化認知. 思考と言語 (楠見孝 編集), 北大路書房, 京都, 245-269, 2010.
- 14) 吉川政夫. 運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ. バイオメカニズム学会誌. 2013 ; 37 : 215-220.
- 15) 青木三枝, 村松慶一, 松居辰則. 視覚的イメージの伝達コミュニケーションにおけるオノマトペと感覚モダリティの関連構造分析. 日本感性工学会論文誌. 2015 ; 14 : 145-153.
- 16) 今井むつみ. ことばと思考. 岩波書店, 東京, 227 ページ, 2010.
- 17) 永山貴洋, 北村勝朗, 齋藤茂. 暗黙知習得過程における学習者の知的協力に対する教育情報の作用の質的分析. 教育情報学研究. 2009 ; 8 : 31-36.
- 18) 中西沙織. 能の稽古における指導言語に関する研究. 北海道教育大学紀要. 2013 ; 64 : 111-119.
- 19) 吉川京子, 茶木香代子. エアロビクスダンスの指導言語に関する研究. 金沢大学教育学部紀要. 1995 ; 44 : 159-168.

# A study of nursing student's onomatopoeia and figurative phrases recognition

Hiroko MITSUI, Hiroko OTSU, Michiko NAKAI,  
Miki NAKAMURA, Akiko HAYASHI

Faculty of Nursing Suzuka University of Medical Science

**Key words:** Onomatopoeia, metaphor, student recognition

---

## Abstract

The current study has been performed aiming at clarifying recognition of onomatopoeia and figurative phrases by nursing students and reviewing their usage for nursing technique demonstration. The study was performed for 262 students of nursing course in University A from whom we obtained a consent. The research was performed for onomatopoeia and figurative phrases using a questionnaire prepared uniquely by researchers based on an aggregation method regarding ① usage frequency, ② subjects to be seen and heard, ③ expressions to be used daily, ④ contents to be imagined, and ⑤ understandability. As a result of the research, figurative phrases are often felt to be "harder to understand" than onomatopoeia, resulting in less frequency to be seen and heard as well as used daily. In case of using these terms for demonstration, it is required to use expressions based on students' life experiences as well as to utilize terms upon explaining in preliminary lectures and simile expressions to be understood easily. Onomatopoeia and figurative phrases are believed to be able to instruct clues of motion with complementary visual information and urge students for evolutionary thinking.

略 歴

---

**三井 弘子**（博士 [経済学]） 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 助教

学 歴：

平成 6 年 日本赤十字愛知女子短期大学 卒業

平成 23 年 東北大学 経済学研究科 博士課程後期 修了

職 歴：

平成 23 年 半田常滑看護専門学校 専任教員

平成 26 年より 現職

主な研究分野：

看護技術教育